

【実践報告】久留米大学教職課程年報 2021, 第 5 号, 32-37.

遠隔授業における学生の主体的参加を促す工夫

—保育者養成課程の演習科目の実践—

諫山 裕美子

(久留米大学 人間健康学部)

【キーワード】遠隔授業、保育者養成、オンデマンド授業、動画配信

1. はじめに

新型コロナウイルスの猛威が広がってから 1 年が経とうとしている中、現在もその感染防止対策に世界中で取り組んでいる。その影響は大学教育にも及んでおり、2020 年 5 月 20 日時点で、全国の大学・高等専門学校 864 校のうち、90.0%が遠隔授業のみで授業を実施していた（文部科学省、2020）。久留米大学でも 2020 年度の前期授業は、学生がインターネットを通じて受講する遠隔授業による授業形態となった。既に大学に導入されていた教育支援ツールを用いて授業を行うことになったが、筆者はこれまで対面による授業では、その教育支援ツールを使用するどころか、ログインすらしたことがない状態での遠隔授業実施の決定を受けた。

筆者は保育者養成課程である人間健康学部総合子ども学科に所属している。乳幼児期の子どもと関わる保育者の養成課程では、保育者の専門性の土台を培う。保育所保育指針（厚生労働省、2018）には、保育者は専門職として多様な「知識及び技術を、状況に応じた判断の下、適切かつ柔軟に用いながら、子どもの保育と保護者への支援を行う」ことが示されている。保育者養成課程ではそのような専門性を培うために演習科目も多いが、遠隔授業においては従来型の演習を行うことは難しい。小川（2013、230 ページ）が保育に関する科目で内容が「単に情報として記憶されるのではなく、思考する内容として習得されなければならない」と述べるように、学生自身の思考を促す授業の工夫が求められる。学生が主体的に学修に取り組み、保育実践で必要となる専門性を磨くために、遠隔授業の中でできる手立てを検討することは喫緊の課題である。

現在の新型コロナウイルスの感染状況から鑑みると、今後も対面授業と並行して遠隔授業の工夫が必要となってくるだろう。そこで、遠隔授業において、学生が主体的参加をするために必要な手立について考察をする。

2. 問題の所在

今年度明らかとなった遠隔授業における課題を整理する。筆者が担当する 1 年生の演習の授業内で設定した遠隔授業に関するアンケートや学生面談からは、遠隔授業で課題となる点として、①授業理解のしづらさと学習実感の乏しさ、②教員への質問機会、③友人との意見交換、④学習スケジュールの調整、⑤通信機器・ネット環境の不備の 5 点が挙げられた。以下に、学生の具体的な困難な状況を確認する。

① 授業理解のしづらさと学習実感の乏しさ

本学の遠隔授業はオンデマンド授業が基本とされており、資料の掲載、動画の配信

等の形態が多かったようである。それに対する学生の意見として「資料がまとめられ過ぎていてわからないところがある」、「授業を実際に受けている気分になれない」など資料を通じての授業が、理解しにくいと感じている学生が多かった。また、「わかりやすいように工夫して頂いているため、わかりやすいものも多いけれど、対面と比べるとやはり自分の理解度を感じられず不安になるから。」「わからない”まま何となく進んでしまう可能性がある。」など、学生自身が授業を理解できたかどうかについて、実感を伴っていないということが推測された。学生の満足度は半数が「どちらともいえない」となっており、遠隔授業による学習実感が得られていないことがわかる。

一方では、「資料を何度も確認できる」と言ったように、授業内容を反芻して学習できるメリットも多く寄せられた。

② 教員への質問機会

多くの教員が教育支援ツールの質問受付機能を用いていたと思うが、タイムラグが生じることは避けられない。「分からないことがすぐに解決できない」、「すぐに質問できないところ、先生も一人なので返答が間に合わなくなってしまう所、理解のしやすさがバラバラ」と、対面授業であると教員に尋ねることができるが、遠隔授業だと難しいと学生が感じている。①の学習実感が伴っていないことの不安から生じる意見であることも考えられる。

③ 友人との意見交換

一方向の配信による遠隔授業では、「友達との意見交換などできない」ことに課題を感じている学生も多かった。対面授業では、少なくとも友人と同じ空間で受講するため、その反応や意見の確認をしやすいが、遠隔授業ではそれが困難となる。自分自身の意見について、その場で議論を交わすことが容易でない点は、学生にとっては不安を感じる環境と言える。

④ 学習スケジュールの調整

遠隔授業では、毎日数コマずつ履修をしている学生にとっては、その科目ごとに新たな授業と課題が公開され、それに取り組む日々である。課題の締め切りは科目の担当者に任せられているので、そのスケジュール管理も必要となる。「課題が多いので締め切り日を管理することが大変」と意見が出ているように、スケジュール管理に課題を感じている学生もいた。面談をしてみると、授業当日に授業内容や課題の確認をする学生は余裕をもった生活ができており、現在の状況にも大きな不安や不満は抱いていないようであった。一方で、締め切りに追われて課題を提出しているという学生は、生活リズムの乱れが見られ、それゆえ遠隔授業に対する苦手を述べることも多かった。

⑤ 通信機器・ネット環境の不備

これは学生個人によって実態は様々である。上記で取り上げた総合子ども学科の1年生は、パソコンとスマートフォンの両方を使用している学生が最も多かったが、中には全ての講義をスマートフォンで受けているという学生もいた。通信制限による困難さを訴える意見は見受けられなかったものの、「ネットのエラーなどによって一回しか受けることができない、小テストや成績に影響が生じて、本来の力が反映されない」等、通信状況に左右される遠隔授業の欠点を指摘した回答もあった。

3. 授業実践における工夫

これまで見てきたように、様々な課題が散見される遠隔授業において、2020 年度後期に、筆者が行った授業の取組について報告する。

(1) 対象授業

本報告の対象授業は筆者が非常勤講師として担当する、保育者養成課程を有する 4 年制大学の演習科目「保育内容（環境）」における取組である。

なお、後期授業期間中に 1 日 4 コマの対面授業をすることが可能になったため、その 4 コマはグループ活動によるプロジェクト課題を行い、残り 11 コマを遠隔授業で行った。プロジェクト活動に向けて、毎週の課題と別に中間レポートも課している。

(2) 授業実践の工夫

1) 演習科目として学生参加を実感できるフィードバック

対面授業が可能であった昨年度までは、授業の中で必ず学生同士の意見交流を行う時間を設けていた。保育においては、前述したように柔軟な対応が求められる。子どもの様子に応じて臨機応変に対応する力を養うには、視野を広くし、多角的な見方や考え方を培う必要があると考える。そこで、個人での回答からグループによる協議へと進め、それを全体に共有することで、多様な意見の理解を促してきた。

遠隔授業でその利点を生かすために、意見交流を行いたい題材（保育実践における環境の写真や事例）について、①1 週前の授業の課題として、題材に対する個人の意見を記述する課題を提示、②締め切りは翌週の授業の 2 日前に設定、③課題締切後、学生の記述した意見を集約し、翌週の授業の中で紹介、その意見をもとに授業展開を構築する、以上の 3 点を授業の基本の流れとし、繰り返した。

2) PPT による資料と動画の配信

授業は資料を PowerPoint で作成し、その説明を動画で収録した。動画収録には、Zoom のレコーディング機能を使用した。Zoom による録画機能は、PowerPoint のスライドショーの録画機能を用いた場合と比較し容量が小さかったため、学生の負担軽減を考慮して用いることとした。1 つの動画の長さは 20 分程度を目安とし、必要に応じて数回に分けた。また、教育支援ツールの授業コンテンツ内には、動画と資料の両方を掲載した。

3) 課題の締め切り設定やコンテンツにおける表示の工夫

前期授業においては、課題提出に遅れが見られる学生も多く、授業を閲覧していても課題が出せていない場合も見受けられたことから、本授業の第 1 回アンケート時に、締切日に関する学生の意思確認をした。すると、「毎週同じ曜日がよい」という意見が最も多かった。そのため、例えば翌週が授業のない日である場合も、常に同じ曜日（授業日の 5 日後）に統一して設定した。

各授業における課題の提示は原則最後のスライドに表示し、他のスライドで用いていない色の枠囲みで課題説明を行うことで、後から課題だけの確認をしやすいようにした。

また、筆者の勤務校と対象授業の大学では別の教育支援ツールが用いられていたが、どちらも共通して、新たに公開された授業がハイライトされることはないため、学生自身が自分で一つずつ授業を開き、前回と見比べて新しい公開内容の確認をする必要があるという難点があった。教員側が資料の追加をした際に、学生に通知する機能もあるが、転送機能や通知のタイミングなど全ての学生にとって取り組みや

すい機能とはなっていない。例えば「NEW」などといったアイコンや、メールの新着表示のように、前回の閲覧時から更新されたコンテンツには、マークがつくようにシステムが改善されると学生の取りこぼしは減ることが想像できる。現段階ではその機能はないため、①実際の授業日に授業の公開を設定、②授業のタイトルに授業日（公開日）を表示、③課題のコンテンツのタイトルに締切日を表示、の3つを行った。

4. 授業後のアンケート評価と実践の振り返り

(1) 授業評価アンケート

上記3つの取組を行い、15回目の授業でWEBによる無記名アンケートを依頼した。アンケートの質問前に、回答内容の集計・分析の同意を確認した上で回答に進むようにしている。本報告では、「保育内容（環境）の授業評価をしてください」という質問に受講生の総数62名のうち回答のあった49名の自由記述の内容を検討する。

表1 学生による「保育内容（環境）」の授業評価

OP	事例数
動画（音声）による理解の深まり	20（40.8%）
プロジェクト（対面授業）での学びや感想	18（36.7%）
課題についてのフィードバックで学びの確認	11（22.4%）
授業時間と課題量の適切さ	11（22.4%）
事例による保育実践への理解	9（18.4%）
他の学生の視点を共有	6（12.2%）
対面授業の増加の希望	5（10.2%）
中間レポートの大変さと学び	5（10.2%）
資料の分かりやすさ	5（10.2%）

回答を意味内容ごとに区切ると、120の事例に分かれた。その事例から23のオープンコード（open code;以下、OP）が生成された。事例数が5以上のOPを表1に示す。

最も多かったOPは「動画（音声）による理解の深まり」である。「資料の提示だけだと意欲が湧かなかったり、理解が十分に至らなかつたりする授業もオンラインだとあるので、先生の声での説明があると、オンラインでも学びやすい環境だなと感じました。」というように、資料だけでなく動画がある方が分かりやすいという意見を回答者の半数が記述した。学生にとっては、資料の掲示だけでなく、教員が実際に説明していく音声がある方が、学生の理解が深まることが示された。

2つ目に多かった「プロジェクト（対面授業）での学びや感想」は、対面授業をグループワークとしたことで、他者と顔を見合わせながら意見交流する良さが語られた。「課題についてのフィードバックで学びの確認」では、遠隔授業で「自分がやっていることが正しいのかどうかよくわからないことが多いですが、先生は課題の傾向をまとめて次の授業で取り上げてくださったので、自分の考えを振りかえることができてよかったです。」と、フィードバックによって学びが深まった、との記述がみられた。

学生の評価アンケートでは、大半が良かった点を挙げていた。これは、保育者が子どもの評価をする際に、子どもが伸びようとしている点を見つめるように、良い部分を認めていく視点をもった、保育者養成課程の学生ならではの特徴なのかもしれない。一方で、「もっと対面授業があってほしいと思う」と「対面授業の増加の希望」や、「課題掲示の分かりにくさ」、「動画はほとんど見ていない」といった意見もあった。対面授業ではなく、遠隔授業をせざるを得ない状況の中で、より一層の工夫が求められる。

(2) 実践の振り返り

遠隔で授業の展開をしなければならない、という状況の中で、学生の主体的参加を促す授業の構築を目指して、できる範囲の授業の工夫を講じた。動画の録画については、細かい編集をしなかったことを条件とするならば、慣れるとさほどの負担にはならず、スムーズに行えた。しかし、学生の声フィードバックする作業は、わずかな時間で学生の回答の確認や授業の構築を行わなければならない、教員の大きな負担となった。学生の評価を見ると、その努力が無駄ではなかったと感じる一方で、授業準備にかかる時間の負荷は大きかった。いくつも授業を抱える教員にとっては難しい手立てでもあり、より効率的に学生にフィードバックが行える仕組みを検討する必要がある。

(3) 保育者養成課程として必要な手立てのポイント

学生の評価の中で、〔事例による保育実践への理解〕や〔より実践的な知識や技能の習得〕と、保育実践の事例を用いた課題を使ったことで、理論を実践的に伝えることが可能になると考える。ただし、ネット上にデータが上がることで、情報の取り扱いには十分留意する必要がある。今回の授業では、写真等の情報の取り扱いについて事前に注意喚起し、また個人が特定されない写真を選ぶなどに留意した。

また、〔他の学生の視点を共有〕することは、保育者の専門性向上に必要な広い視野や多角的な見方や考え方を培うことにつながっていく。後期授業においては教員が一方的に学生の意見を紹介するに留まったが、今後は学生同士が交流できる手立ても進めていきたい。

5. 今後の課題と提案

今回報告した実践は、すでに当たり前に取り組んでいる教員も多くいるであろう。しかし、筆者にとっては突然の遠隔授業開始に際し、戸惑い、方法を模索した1年だった。現在の新型コロナウイルスの感染状況は楽観できるものではなく、今後も感染拡大防止に留意した大学教育の提供が求められていくことは想像に難くない。遠隔授業だけではなく、対面授業とのハイブリッド式になると、学生の通学時間を考慮した配慮をする必要も出てくる。それらを踏まえ、今後の課題を2点あげる。

1点目は要望として、遠隔授業のメリットとして「いつでも受講が可能」と言ったメッセージを流すことをやめ、「授業日にアクセスし、内容を確認する」ことを推奨することである。問題の所在で述べた、スケジュール管理が苦手な学生にとって、遠隔授業は大変つらいものとなっていた。毎日の授業で課題が出される中、1つの課題が遅れると、ドミノ倒しのように他の課題へと影響が及び、悪循環が生まれてしまう。学生の課題回答時間を見ると、授業日から回答締切まで5日空いていても、平均して7~8割が締切間際の提出をしていた。実習指導などで学生に連絡をする必要があっても「日中はバイト」であると、連絡が取れないことも多かった。確かに、自分の時間を有意義に過ごすことができ、バイトや好きなことに没頭できる時間が格段に増えただろう。しかし、大学生として生活していく中で、対面授業だけの生活の時は当たり前に大学に来ていた時間に働き、昼夜逆転した生活を送ることが、果たして大学の学びを最大限享受したと言えるだろうか。学生と話すと、毎日授業日に授業内容を確認し、課題を提出している学生ほど、余暇の時間の使い方が有効であることが、少ない対象数だが明らかだった。教員側も「いつでも受講が可能」とされている以上、課題の締め切りを短い期間に設定

することがしづらく、そのことにより翌週の授業準備に追われ、ストレスがかかる。このことを踏まえ、対面授業を想定した従来の授業日に視聴を推奨する遠隔授業への参加を促していただきたい。

もう1点の課題は、よりインターネット機能をフル活用したグループワークの実践である。例えば、Zoomのブレイクアウトルーム等のチャットルームを用いたグループワークの実践は多く報告されている。来年度はこれを利用した授業展開も検討したい。ただし、その際は学生の通信環境の確認や、負担軽減の配慮は不可欠である。

最後に、大学初年次に遠隔授業が中心であった1年生にとっては、大学に通うというイメージすら沸きにくい年となった。後期授業最後に遠隔面談をした際、「思っていた大学生活と違いました」とほとんどの学生が訴えた。保育者養成においては、人との関わりの中で育つ子ども達を育てる保育者として、教員や、学生同士のコミュニケーションは欠かせない。また、主体的に授業に参加し、自ら課題に取り組み、他者と協働しながら課題解決を行う経験の積み重ねが重要となる。その経験の保障をいかにしていくか、今後も検討を重ねていくことが保育者養成課程の教員に課せられた課題である。

文献

厚生労働省（2018）保育所保育指針解説．フレーベル館

文部科学省（2020）新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況．https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf

（2021年1月25日閲覧）

小川博久（2013）保育者養成論．萌文書林